発話動詞と共起する *-ly* 副詞

——誤誘導のテクニック——

稲 木 昭 子

1. はじめに

推理小説という枠組みの中では，作者は犯人明かしをできる限り最後まで引き延ばしたいが，同時に読者に対しては犯人を推理させるための必要十分な情報を順次与えていかねばならない。偽であることを述べることも，作者の守るべきフェアネス（fairness）と抵触する。そこで読者を迷わすための様々な誤誘導（misdirect）のテクニックを駆使する。この点は作者の腕の見せ所となる。この推理小説でさらに語り手が *I* の時，作者に課せられる枷は一段と大きくなり，それとともにますます文体論的な技巧が必要となっていく。*I*-narrator の場合，たとえば語り手が自分以外の他人の行動を表現する時に，仮にその表現が事実を述べていなくても，自分の判断として述べているわけであるから，読み手側から真を言っていないと非難されたとしても，回避の口実は可能である。しかし自分の行動を述べる時は，当然真偽の判断はついているわけであるから，偽りを述べるわけにはいかない。しかし同時に常に真であることだけを語っていては，カムフラージュもできないわけであるから推理のおもしろさもなくなってしまう。そこで，一見すれば真であることを述べているかのように見せて読み手を誤誘導できる可能性を作り出しながら，その実，偽りを指摘されたとしても別の「読み」という抜け道を整えておくという巧妙なやり方がある。この時語り手は偽りを言っているわけではないから，語り手のフェアな立場は守ることができることになる。

Agatha Christie の作品，*The Murder of Roger Ackroyd*（以下 *Ackroyd* と略記）は，医師シェパードが残した手記の形で綴られているが，実はこの語り手こそがファラーズ夫人を恐喝し，さらにアクロイドを殺した犯人なのである。犯人が *I*-narrator という型破りの設定の中で，語り手は犯人究明のための手がかりは全て提示しつつ，自分に係わるところは巧みにぼかしたり，犯行に関係のないところは自分の本心を見せたりと，ことばの上で様々な工夫を凝らしつつ，情報を操作していくことになる。

Ackroyd を一読してすぐに気付くのは副詞が多用されている点である。特に犯人である語り手の発言を自ら描くときに，副詞が付加されていることが多い。なぜ副詞の多用が見られるのか，その文体的な効果はどのように捉えられるのであろうか。おそらくこれも，作者の守らなければならない推理小説としてのフェアネスというメタ的な枷の中で，必然的にとられることになる情報操作に関係する文体上の一つの工夫と考えられる。

そこで *Ackroyd* における副詞に関する客観的なデータを PC を利用して抽出し，その数量的特徴をおさえたうえで，さらに副詞の巧みな使用が見られる具体例を分析し，その質的特徴を探って，*I*-narrator-criminal の推理小説における副詞の効果的な使用法を考察することにする。

2. コンピュータ処理

具体的なコンピュータ処理として，まず *Ackroyd* をコーパス化してスモールコーパスを作成し，さらに Brill's Tag を付与したタグ付きコーパスも作成する[1]。コーパス処理プログラムとしては，Scott（1999）作成のワードスミス（*WordSmith*, version 3.0）を利用する。最初にタグ付きコーパスを使用して，品詞別の頻度数をまとめると，頻度数において副詞は動詞の約 3 分の 1 に相当することが抽出される[2]。ただし，タグ付きコーパスで副詞を検索した場合，単独の副詞は抽出できるものの，'in a foolish manner' の様な句の形で副詞の働きをしているものを，副詞句として抽出することはできない。従って副詞相当語句全体の頻度数は動詞の 3 分の 1 以上になると考えられる。副詞が修飾する語は一義的には動詞となるが，*Ackroyd* ではどのような種類の動詞との共起が頻繁にみられるのであろうか。副詞句を含めた全ての副詞相当語句の抽出は機能上難しいので，ここでは単独の副詞の代表として，形態的に *-ly* がつくものに絞ることにする。

ケニイ（吉岡訳 1982：199）は，コンピュータによるテクストの量的研究において，作家固有の文体的特徴を探り出したり，一人の作家の文体的変遷をたどるための具体的な調査項目の 1 つに多出語とその連結を挙げている。そこでまず，ワードスミスのコンコード・ツール（Concord Tool）を使用して *-ly* 副詞を検索し，結果のコンコーダンスを表示して，その show collocates のプログラムで *-ly* 副詞の共起語関係を表示すると，図 1 となる。

図 1 は，*-ly* 副詞の前後 5 語の範囲の合計で，共起頻度が大きい単語を上から順に表示している。この図から動詞との共起を見てみると，共起頻度の一番大きい動詞は *said* となる。しかもこの語は副詞のすぐ左側 1 語目の位置で，一番共起頻度が大きいことが分かる。つまり *said* という発話動詞（verb of saying）は，*-ly* 副詞と頻度が大きく共起する代表的な語となる。

ワードスミスのキーワード・ツール（KeyWords Tool）は，より大きなコーパスと比較した結果出てくる当該のコーパスのキーワードを表示してくれる。このツールは，当該のコーパスの語数と，それよりもより無色で一般的でさらに大きな，reference set of words と呼ばれるコーパスの語数を比較して，統計的に特に有意に頻度が大きい（あるいは小さい）単語をそのテキストのキーワード（key words）として取り出すものである。Scott（2002：61）は，このキーワードを，'these items can help to characterize a set of texts or a single text in terms

N	WORD	TOTAL	LEFT	RIGHT	L5	L4	L3	L2	L1	*	R1	R2	R3	R4	R5
1	THE	583	268	315	65	66	59	53	25	0	81	59	57	64	54
2	SAID	349	273	76	9	17	36	89	122	0	16	12	13	16	19
3	AND	245	124	121	31	25	22	17	29	0	25	18	28	23	27
4	WAS	228	125	103	9	11	19	22	64	0	24	24	18	14	23
5	THAT	228	111	115	18	23	47	14	9	0	33	16	25	20	21
6	YOU	209	89	120	27	17	15	12	18	0	33	22	28	17	20
7	POIROT	148	101	45	7	12	9	17	56	0	15	11	7	5	7
8	NOT	132	62	70	18	11	9	9	15	0	14	13	18	14	11
9	SHE	126	69	57	8	13	10	32	6	0	11	11	9	12	14
10	HIS	117	53	64	8	12	18	12	3	0	15	6	12	20	11
11	HER	105	53	52	11	10	13	9	10	0	16	9	9	9	9
12	HAVE	104	34	70	9	7	5	5	8	0	17	10	12	16	15
13	BUT	103	52	51	13	7	12	8	12	0	7	7	11	11	15
14	HAD	95	47	48	5	10	5	8	19	0	11	9	9	9	10
15	WITH	87	40	47	9	15	6	6	4	0	9	11	11	7	9
16	ACKROYD	85	41	44	5	3	8	17	8	0	10	6	9	7	10
17	ONLY	84	8	7	2	2	1	1	2	69	1	3	1	1	1
18	HIM	80	39	41	5	7	2	6	19	0	9	6	8	5	13
19	REALLY	75	5	3	1	0	3	0	1	67	0	1	2	0	0
20	CAROLINE	72	48	24	4	6	8	4	26	0	6	9	2	3	4

図 1　*–ly* 副詞の共起語関係

N	WORD	FREQ.	OYD.TXT%	FREQ.	TTEN.LST%	KEYNESS	P
1	POIROT	*433*	*0.61*	41		5,923.7	0.000000
2	I	*2,480*	*3.51*	514,122	0.57	4,942.8	0.000000
3	ACKROYD	*342*	*0.48*	87		4,466.1	0.000000
4	CAROLINE	*207*	*0.29*	1,563		1,689.8	0.000000
5	YOU	*1,228*	*1.74*	382,919	0.42	1,628.1	0.000000
6	RALPH	*186*	*0.26*	1,106		1,600.6	0.000000
7	SAID	*812*	*1.15*	181,340	0.20	1,504.0	0.000000
8	FLORA	*170*	*0.24*	1,220		1,403.7	0.000000
9	PARKER	*157*	*0.22*	1,104		1,302.3	0.000000
10	PATON	*103*	*0.15*	63		1,254.7	0.000000
11	BLUNT	*123*	*0.17*	595		1,104.7	0.000000
12	INSPECTOR	*164*	*0.23*	2,655		1,100.4	0.000000
13	ME	*533*	*0.75*	111,440	0.12	1,044.2	0.000000
14	SHEPPARD	*80*	*0.11*	136		861.0	0.000000
15	RAYMOND	*98*	*0.14*	720		804.8	0.000000
16	FERNLY	*56*	*0.08*	0		801.9	0.000000
17	MISS	*173*	*0.24*	11,481	0.01	695.3	0.000000
18	MY	*462*	*0.65*	129,018	0.14	688.1	0.000000
19	ACKROYD'S	*53*	*0.08*	21		670.7	0.000000
20	HE	*1,084*	*1.54*	573,485	0.63	653.7	0.000000
21	FERRARS	*47*	*0.07*	5		640.1	0.000000
22	GANETT	*43*	*0.06*	0		615.7	0.000000
23	RAGLAN	*47*	*0.07*	29		572.0	0.000000
24	URSULA	*62*	*0.09*	268		569.4	0.000000
25	MADEMOISELLE	*47*	*0.07*	183		440.4	0.000000
26	MRS	*154*	*0.22*	20,565	0.02	420.7	0.000000
27	YES	*143*	*0.20*	20,872	0.02	368.1	0.000000
28	DICTAPHONE	*27*	*0.04*	8		349.0	0.000000
29	RUSSELL	*60*	*0.08*	1,727		336.6	0.000000
30	POIROT'S	*26*	*0.04*	9		332.4	0.000000

図 2　*Ackroyd* のキーワード

of both content and style' と説明する。つまり当該のコーパスがどのような内容で，どのような文体論的な特徴をもったテキストであるのかという，テキストの aboutness について示唆する語となる。ここではリファレンス・コーパスとして，British National Corpus の書きことばのコーパスを選択し，*Ackroyd* のキーワードを表出すると，図2となる[3]。

キーワードとして，当該の物語の登場人物名が表出されるのは当然の結果と考えられる。また *Ackroyd* は *I*-narrator の推理小説であることから，人称代名詞の *I* がリストの2位を占めている。この様にキーワードの上位は固有名詞，代名詞などによって占められるが，その中に動詞の *said* が含まれている点は注目に価する。



図3　検索語 *said* のプロット

図3のプロットから *said* が物語の最初から最後までまんべんなく，しかも頻度大きく使用されていることが分かる。つまりこの物語は会話体で筋運びがおこなわれていると捉えられる。

図1から，*-ly* 副詞と共起する一番頻度の大きい動詞は *said* であり，さらに図2から，*Ackroyd* のキーネス（keyness）を表す語として，動詞の *said* が特徴的に抽出されたことになる。さらにこの語は図3でテキスト全体に亘って表出されていることが分かる。そこで *said* を代表とする発話動詞全体へと検索範囲を拡げ，それらと共起する *-ly* 副詞を抽出する。発話動詞として広く（1）を取りあげ，主語を *I* に限定することにする。

（1）　asked/began/cried/demanded/exclaimed/inquired/interrupted/
observed/protested/queried/murmured/remarked/said/suggested

Ackroyd コーパス中の，「*I*＋発話動詞」の頻度数は316例，このうち *-ly* 副詞付きの場合は130例となり，これは全体の約41％に相当する[4]。使用される *-ly* 副詞を以下に列挙する。

（2）　awkwardly, apologetically, apprehensively, bitterly, brusquely, brutally, cautiously, coldly, confidently, curiously, diffidently, doubtfully, dryly, eagerly, encouragingly, enviously, firmly, frankly, gently, gloomily, gravely, grumpily, hastily, helpfully, hesitantly, hesitatingly, impulsively, incredulously, irritably, kindly, maliciously, mechanically, mildly, nervously, politely, quickly, regretfully, repressively, ruefully, sarcastically, sharply, sheepishly, simply, slowly, solemnly, stiffly, suddenly, sympathetically, thoughtfully, untruthfully

3. 副詞の種類

使用されている副詞は主として主語指向副詞（subject-oriented adverb）と様態副詞（manner adverb）に分類される種類のものである。

この主語指向副詞を，荒木他（1992：1417）は，「その文の述部で述べられている動作・行為・状態に関しての主語の状態を述べる……意味的には，出来事に対する話し手の評価・判断が表されているという点で文副詞に近く，出来事に付随したことを表しているという点では，様態の副詞に近い特徴を持っている」と説明する。主語指向副詞には先ず（3）のような主語の一般的な心的態度を表す副詞が含まれ，語順としては（4）のように文頭にくることが多い。

（3） bitterly, resentfully, sadly, carefully, gladly, frankly, confidentially, clumsily, knowingly, anxiously

（4） *Bitterly*, she knew that he had a territorial claim on her soul.（Corpus：ukbooks/08. Text：B 0000000926.）[5]

また主語指向副詞には，（5）のように行為の意志性を明示的にする種類のものもあり，（6）のような様態の副詞と同じ位置にくることが多い。

（5） deliberately,（un）intentionally, purposely,（in）voluntarily, willfully,（un）willingly, on purpose, with reluctance

（6） She *deliberately* chose pop and not jazz to try to avoid comparisons with her father's voice.（Corpus：today/11. Text：N 6000920227.）[6]

一方，様態の副詞は，荒木他（1992：837）では，「動作・行為の有様を形容する働きを持つ副詞」と説明される。'in a(n)...way/ manner/style/fashion' の形で実現されることが多く，動詞の直前か，動詞あるいはその後にくる文要素の後にくることが多い。

（7） The Afghans, unused to such excitable behaviour leaned forward interestedly....（Corpus：ukbooks/08. Text：B 0000000124.）[7]

堀田（1989：127）は，様態副詞は基本的に人の動作を客体化して外側から記述するときに用いられるので，（8）のように主語にエンパシーがある時には原則として用いられない，

と説明する。

?(8)　I looked at her *interestedly*.

主語が話し手の場合，そこにエンパシーがくるべきなのに，interestedly（興味ありげに）のような，動作主である主語の外に視点をおいて行為を記述する様態副詞と共起すると，エンパシーの矛盾が起こるからである。

様態の副詞として用いられる副詞のほとんどが主語指向副詞としても用いられるが，これらの意味の差を（9），（10）の例文で考えてみる。

（9）　He spoke *bitterly* about their attitude.

（10）　He said *carefully*.

(9) の副詞が主語指向副詞としての用法であれば，「彼は悲痛な思いで，彼らの態度を語った」となり，一方様態副詞として使われているのであれば，「彼は彼らの態度をにがにがしげに語った」となる。(10) が主語指向副詞の場合は，〈言うという行為をした時彼は注意深かった〉ということになり，様態副詞の場合には，〈相手の様子をうかがいながら言った〉となる。

例文（9），（10）のような三人称主語の場合，これらの副詞は主語指向副詞と様態副詞の二つの読みが可能であるが，主語に一人称がくる（11），（12）の場合は事情が変わってくる。

（11）　I spoke angrily.

（12）　I asked carefully.

(11) が主語指定副詞の場合には，書き換えると，'I was angry when I spoke.' となるが，様態副詞の場合には，'?(I spoke in an angry manner.)' となる。(12) が主語指向副詞の場合は，'I was careful when I asked.' となり，尋ねるという行為をした時私は注意深かったとなるが，様態副詞の場合は，'?(I asked in a careful manner.)' となる。

一人称主語の場合，様態読みか主語指向読みかはあいまいな場合がある。普通様態読みは排除され，主語指向読みとなる。ただし，話し手が自分が怒っているという印象を意識的に相手に与えようとしている場合の，様態読みも有効である。特に *I*-narrator の場合には，自分を客体化する語り手として，自分の動作の有様を読み手にわざと知らせる時に使用されると捉えられるからである。従ってこの場合の読みは有標（marked）ということになり，一方

の主語指向読みは通常の無標（unmarked）読みとなる。

「*I*＋発話動詞＋*-ly* 副詞」の形式では，すなわち主語が *I* の場合では，様態副詞の一部との共起の相性が悪くなるが，これを主語指向副詞と読むと，副詞は *I* のその時の心情表現となる。推理小説においても普通この読みになり，語り手の本音を吐露したものとしてとらえられ，ごまかしのない情報提示として働くことになる。ところがもう一方の様態副詞読みも可能であるわけで，この場合語り手は自分を客観視し，自分の外面表記の形で内面をカモフラージュすることが可能となる。意識的に自分の動作のあり方を読み手に知らせることになり，一見すると客観性を帯びた心情表現ともとれる錯覚を与えることが可能である。この自分を客体化して自分に関する情報を読み手に意識的に与えるということは，語り手の誠実な態度表示ということにもなるが，裏を返せば，巧妙な情報操作になる可能性が大となる。*Ackroyd* が *I*-narrator で，しかも *I* が犯人という型破りな設定では，この種の副詞の多用が情報操作の一役を担っていると捉えられる。

4. 具　体　例

コンコーダンスから適宜抽出した具体例で，主語指向副詞の読みか，様態副詞の読みかを考えてみることにする。

(13)　Ackroyd rose and walked up and down. Presently he sank into the chair again. "Look here, Sheppard, suppose we leave it like this. If no word comes from her, we'll let the dead things lie." "What do you mean by word coming from her?" I asked *curiously*. "I have the strongest impression that somewhere or somehow she must have left a message for me－before she went. I can't argue about it, but there it is." I shook my head. "She left no letter or word of any kind?" I asked.

(13) ではファラーズ夫人は，夫殺しで脅迫されているという自白をアクロイドに残し，自殺を図る。アクロイドは，一旦はファラーズ夫人の名誉のためにこのままこの事件を闇に葬ろうとする。そこで「万一，夫人から何も言ってこなかったら」という条件をつける。このことばに，医師は，〈「夫人から何か言って来るというのはどういう意味ですか？」と，興味津々尋ねた。〉

医師の尋ねている内容は，自分にとって極めて興味があったどころではない，もし仮に夫人の手紙か伝言が残されているとなると，おそらく夫人は恐喝者の名，つまり自分の名前を言っていることになるので，これは自分にとっては破滅的なことである。この副詞が主語指向副詞の用法であるなら，語り手は自分の心情について嘘を語ったことになる。つまり，こ

の時の語り手の心情としては興味津々どころではないという状況に追いやられているからである。*curiously* を読み手が主語指向副詞の用法ととってくれるならこれほど都合のよいことはない。この場合これは語り手の嘘の心情表現であるものの，読み手は誤誘導されるからである。

一方もしこれを様態副詞とするなら，この場合副詞は主語 *I* との相性が悪いというものの，語り手は自分を客体化して客観描写した形で読み手に知らせていることになり，客観視の分語り手の責任は薄れ，その真偽は読み手に任されることになる。語り手側から言えば，自分の本音をカモフラージュ可能である。*I*-narrator-criminal の時には特にこの2通りの読みは，巧妙な誤誘導の方策として機能していることが分かる。

(14) ". . . . Not mentally responsible. That's the line to take, clearly. I read only the other day that they're very happy in Broadmoor－it's quite like a high-class club." But Caroline's words had reminded me of something. "I never knew that Poirot had an imbecile nephew?" I said *curiously*. "Didn't you? Oh, he told me all about it. Poor lad. It's a great grief to ail the family. They've kept him at home so far, but it's getting to such a pitch that they're afraid he'll have to go into some kind of institution."

(14) で姉のキャロラインは，弟の医師に対して，ラルフは精神病学的に犯行に責任がもてないという方向で助けるようにと助言し，続けて精神病院の話題を持ち出す。医師は実際にはラルフを精神病院に匿っているので，その話題がこれ以上発展しない様に，精神病に関係する別の話題を持ち出して，話題をそらす。〈「ポワロに精神病の甥がいるなんて知りませんでしたよ」と，私は興味津々尋ねた。〉一見本当に好奇心があって質問しているようにとれる。しかも読み手に好奇心いっぱいの状況をあたかも真の心情表現であるかのような印象を与えることが可能である。同時にもう一方の読みの可能性が残っている分，仮に自分の真の心情を表していないと指摘されても言い逃れは可能である。

(15) "And he telephone call?" "Parker sent that alright－perhaps before he thought of the locked door and open windows. Then he changed his mind－or got in a panic－and decided to deny all knowledge of it. That was it, depend upon it." "Yes-es," I said *rather doubtfully*. "Anyway, we can find out the truth about the telephone call from the exchange. If it was put through from here, I don't see how anyone else but Parker could have sent it. Depend upon it, he's our man. But keep it dark－we don't want to alarm him just yet, till we've got all the evidence. I'll see to it he doesn't give us the slip. . . ."

(15) でアクロイド殺人が発見されるきっかけになった電話をだれが医師にかけたのかという話になり，警部がパーカー説を述べた。これに対し，〈「そうでしょうか」と私はいささか曖昧に答えた。〉もちろん医師はパーカーでないことは百も承知である。警部のことばに対するコメントが，rather doubtfully で言われたことになるが，この副詞が主語指向副詞であるなら，私はためらいの気持で言ったということになる。事実を知っている「私」が，その様な気持ちで言ったと表現することは，虚偽の情報提示になる。しかしこの副詞には一人称主語とは相性の悪い様態副詞の場合も可能であるので，曖昧な感じで言ったという読みの解釈でもって，語り手として真なることを述べているという立場を守ったことになる。

(16) He pressed the bell, then, coming back, threw himself into a chair. "Not to mince matters," he said gloomily, "I'm in the devil of a mess. In fact, I haven't the least idea what to do next." "What's the matter?" I asked *sympathetically*. "It's my confounded stepfather." "What has he done?" "It isn't what he's done yet, but. what he's likely to do." The bell was answered, and Ralph ordered the drinks.

(16) でシェパードは殺人現場からまっすぐスリー・ボアーズ館へラルフに会いに行く。そこで医師は状況が彼にとって非常に不利であることを知っているにもかかわらず，ラルフに「これからどうしたらいいのか，全く分からないのです」と言われると，〈同情を込めて「どうしたのだ？」と尋ねた。〉もちろんこの時点で，読み手にアクロイド殺人の犯人がラルフであるかもしれないというヒントは残しても，*I* であるシェパードが犯人であるという匂わせはでてこない。ここはシェパードの心からの同情心と読み手は読んでしまう。同時に自分を客体化して，第三者の目から述べられた動作の有様として，その真偽に対して，語り手に逃げの場を与えることも可能である。これはあたかも自分の見せかけの演技を真の態度として読み手に印象づけることが可能となる巧妙なやり方である。この後，医師は状況がラルフにとって非常に不利であることを狡猾に利用して，彼に失踪を勧め，精神障害者の療養所に自分の患者として送り込み，警察の眼から彼を隠すことに成功する。しかしこの点が明らかになるのは，物語の終わりの 24 章まで持ち越される。

具体例で取り上げた種類の副詞は，様態副詞として使用された時に，特に主語のエンパシーに対する選択制限をもち，感情焦点の置かれた主語とは共起しにくい性質があり，主語のエンパシーに敏感なものである[8]。しかしこれらの副詞に二通りの読みが可能である以上，作者の側からすれば，読者が副詞を無標読みしてくれるなら，これは読者を誤誘導することに成功したことになる。もし仮に語り手が真の心情を表現していないと非難を受けたとしても，もう一方の読みという抜け道の用意があるので，その非難は回避できることになる。

5. おわりに

I-narrator が自分の行為を記述する場合，その時の気持や意図はその人自身のものであるから，偽りのないところを表現することは可能である。しかし *I*-narrator-criminal の場合，自分の心理や考えを隠さずにありのままを読み手に明かしてしまえば，自分が犯人であることがすぐに推定可能となり，読み手の謎解きの楽しみは奪われることになる。また偽りを言って読み手をだますことはアンフェアでありルール違反である。そこで一見真なることを表出しているかのような印象を読み手に与えつつ，実はそれは自分の本音のカモフラージュになりうるという方便は，非常に有効な方策となる。

犯人究明のための手がかりは順次提示しつつも，できる限り犯人究明は最後までもちこたえたいという作者の立場からいえば，*Ackroyd* における副詞の多用が犯人推理の楽しみを最後までもっていくための，誤誘導の可能性を作り出す一つの技巧として便利な方策であると言える。

作者は副詞の一部に見られる主語指向副詞の読みか様態副詞の読みかの曖昧性を利用しつつ，情報操作を巧みに行って，推理小説の作者としてのフェアな態度を守りつつ，一人称主語が犯人であるという型破りな設定にもかかわらず，その謎解きを最後まで引っ張っていくのである。

注

1　スモールコーパスの概念については，Ghadessy et al.（2002）を参照。

2　タグ付きコーパスを使用して，品詞別の頻度数をとる。

品詞（Brill's Tag）	頻度数
名詞（NN, NNS, NNP, NNPS）	17,662
動詞（VB,VBD, VBG, VBN, VBP, VBN, VBZ）	14,458
代名詞（PRP, PP）	8,683
前置詞（IN）	8,108
冠詞（DT）	6,147
副詞（RB, RBR, RBS）	4,708
形容詞（JJ, JJR, JJS）	4,051

3　BNC の Written corpus のワードリストは，下記のサイトからダウンロードしているが，これは様々なジャンルに分類される 9000 万語からなるコーパスのワードリストである。

http : //lexically.net/downloads/version4/downloading%20BNC.htm

4 「*I*＋発話動詞＋-*ly* 副詞」のコンコーダンスを抽出する時，検索動詞の項目数が多いため 1 度に処理できないので，検索を 2 回に分ける。

①asked/began/cried/demanded/exclaimed/inquired/interrupted/observed/

protested

②queried/murmured/remarked/said/suggested

①，②のそれぞれの cnc ファイルを〈merge〉して，結果のコンコーダンスから不適切なもの（例えば，context search horizons の設定を 2 L, 2 R としているので関係のないものを抽出したり，検索語 -*ly* そのものにも，副詞でない語も含まれる）を取り除いて一つのファイルを作成する。並び替え（〈center〉〈file〉と設定）した結果のコンコーダンスを次に示す。付属的に副詞句も抽出されるが，それはそのまま残している。

N	Concordance	Set	Tag	Word No.	File	%
1	n tell you." "He died?"	I	asked	sympathetically.	5,008	7
2	s Fat "What is Fate?"	I	asked	irritably. "That I s	5,182	7
3	"What's the matter?"	I	asked	sympathetically."	6,935	10
4	avy voice. "Who by?"	I	asked	sharply. "His wife.	9,680	14
5	ord coming from her?"	I	asked	curiously. "I have	10,542	15
6	here is Mr. Ackroyd?"	I	asked	suddenly. "Still in	11,919	17
7	nt to go and see him?"	I	asked	slowly. "Now why	17,949	25
8	you are doing wisely?"	I	asked	gravely. "Of cours	18,056	26
9	g his luggage behind?"	I	asked	gently. Flora sta	18,417	26
10	" "She is sure of that?"	I	asked	sharply. "Quite su	23,394	33
11	lph." "And aren't you?"	I	asked	gravely. Flora sta	26,377	38
12	o you want me to ask?	I	asked	apprehensively. "I	27,611	39
13	that summer-house?"	I	asked	curiously. "My fr	36,781	53
14	the scrap of cambric?"	I	asked	curiously "What	36,902	53
15	"Why can't Annie go?"	I	asked	coldly. "She's d	41,287	59
16	n about the glasses?"	I	asked	curiously. Poiro	43,404	62
17	se?" "What exactly?"	I	asked	cautiously. "This	58,256	83
18	ally think of the stuff?"	I	asked	nervously. "You w	62,140	89
19	alph Paton is hiding?"	I	asked	incredulously. "	62,960	90
20	alph Paton is hiding?"	I	asked	incredulously. "	63,132	90
21	mmitted the murder?"	I	asked	incredulously. "	66,565	95
22	"Who told you so?"	I	asked,	very much surpri	5,609	8
23	ss are you talking of?"	I	asked,	very much surpri	46,250	66
24	d the telephone call?"	I	asked,	trying to rally. "	69,074	98
25	g." "What is that?"	I	asked.	Curiously. "E	20,968	30
26	"As far as that goes–"	I	began	doubtfully. yours	29,899	43
27	hen I am alone." "No,"	I	cried	impulsively, "read	11,044	16
28	at is yout diagnosis?"	I	demanded	coldly. "An un	972	1
29	e hall. "Where is he?"	I	demanded	sharply. "I be	11,721	16
30	in." "Flora Ackroyd?"	I	exclaimed	in surprise.	4,051	6
31	nt to see." "Not you?"	I	exclaimed	in surprise. "	54,683	78
32	ckmail?" "Blackmail?"	I	exclaimed,	very much st	15,977	23
33	milkman tell you that?'	I	inquired	sarcastically. S	778	1
34	ed." "I know that too,"	I	interrupted,	with modest	6,005	9
35	." "I'm sure you have,"	I	murmured	mechanically.	32,908	47
36	orphine hydrochloride,"	I	murmured	mechanically.	36,744	53
37	against Ralph Paton,"	I	observed	gloomily. Poir	61,429	88
38	m her." "Come, now,"	I	protested	mildly, "you s	44,250	63
39	h me." "The Larches?"	I	queried,	surprised. "To s	17,794	25
40	ity. "He would say so,"	I	remarked	bitterly. "Mode	32,504	46

41	not my besetting sin,"	I	remarked coldly.	"I can	41,179	59
42	rker, you said it was,"	I	remarked bitterly.	"#Mon	52,621	75
43	ust coming, my dear,"	I	said hastily.	"I've been h	533	1
44	ve a letter of any kind,"	I	said sharply, and not se		1,294	2
45	de into consideration,"	I	said repressively.	"Will t	1,350	2
46	glad to leave?" "Yes,"	I	said slowly.	"I fancy tha	4,798	7
47	in the world." "Yes?"	I	said encouragingly. For t		4,902	7
48	monsieur!" "Just so,"	I	said kindly. Clearly a reti		4,924	7
49	e." "In the Argentine,"	I	said enviously. I have ah		5,034	7
50	Captain Ralph Paton,"	I	said slowly.	"I have not	5,441	8
51	go scot-free?" "I see,"	I	said slowly.	"You want t	10,449	15
52	he said. "Quite sure"	I	said surprised.	"Why?"	10,800	15
53	want to be disturbed,"	I	said coldly.	"He told me	11,266	16
54	diately. "I'm afraid so,"	I	said ruefully.	I ran down	11,606	16
55	alarm the household,"	I	said hesitantly.	Parker	12,192	17
56	ou mustn't touch that,"	I	said sharply.	"Go at onc	12,466	18
57	alarm the household,"	I	said hesitantly.	Parker	12,756	18
58	ou mustn't touch that,"	I	said sharply.	"Go at onc	13,027	18
59	ou think it's burglary?"	I	said slowly.	"What else	13,320	19
60	imself in such a way,"	I	said confidently.	"It's mu	13,344	19
61	bout anywhere?" "Oh!"	I	said suddenly.	"What is	13,914	20
62	pon?" "I'm afraid not,"	I	said regretfully.	"It was a	15,782	22
63	hing about blackmail,"	I	said slowly,	"he must ha	16,001	23
64	y one thing against it,"	I	said slowly.	"If Ackroyd	16,314	23
65	end upon it." "Yes-es,"	I	said rather doubtfully.	"A	16,488	23
66	"So that's who he is,"	I	said slowly.	"You've he	17,896	25
67	own the room. "Flora,"	I	said gravely,	"be guided	18,156	26
68	from last night, if so,"	I	said slowly.	"He doesn't	18,540	26
69	th." "My dear Flora,"	I	said gently,	laying my h	18,592	26
70	t was my only motive,"	I	said stiffly.	"It was not t	19,208	27
71	evening." "Not at all,"	I	said sharply.	The little d	19,274	27
72	y of Inspector Raglan,"	I	said solemnly.	"Well, we	19,800	28
73	hing of your methods,"	I	said hastily, to cover my		21,043	30
74	of it before-eh?" "No,"	I	said truthfully.	"I wish I	24,491	35
75	nd all for nothing, too,	I	said sympathetically.	"I	26,658	38
76	ation?" "Yes, indeed,"	I	said eagerly.	"There's no	27,520	39
77	ns a pattern husband,"	I	said cautiously.	"Blackg	27,909	40
78	wers of arrangement,"	I	said dryly.	"If his death was	30,432	43
79	rdered Mrs. Ackroyd,"	I	said brutally.	She gave a	30,448	43
80	e seemed a nice girl,"	I	said hesitatingly.	Poirot	30,752	44
81	o motive whatsoever,"	I	said firmly.	His gaze re	30,922	44
82	on this." "Poor Ralph,"	I	said with a sigh.	"You b	31,105	44
83	d me. Damn my liver,"	I	said irritably.	"Did you tal	32,398	46
84	g about it. "Caroline,"	I	said sharply,	"did you tel	32,593	47
85	ssily "Including mine,"	I	said dryly.	"Very well.	34,001	49
86	g her a swelled head,"	I	said dryly.	"What about	35,899	51
87	I suppose they would,"	I	said grumpily.	"What ab	36,003	51
88	ou're laughing at me,"	I	said stiffly.	"Of course, I'	36,240	52
89	n a few suggestions,"	I	said apologetically.	"B	37,095	53
90	s rather more difficult,"	I	said slowly.	"I shall have	37,482	54
91	re you Mrs. Ackroyd,"	I	said brusquely,	"I should	38,821	55
92	handkerchief. "Yes,"	I	said encouragingly.	"Yo	38,994	56
93	ence." "Hardly that,"	I	said dryly.	"They are us	39,135	56
94	top drawer." "I see,"	I	said helpfully.	"So you s	39,442	56
95	"Of course it wasn't,"	I	said hastily.	"You must f	39,488	56
96	e been Miss Russell,"	I	said thoughtfully.	Mrs. A	40,154	57
97	she asked. "Do you?"	I	said sharply.	She shook	40,457	58
98	re? "I can't remember,"	I	said slowly.	"I think it w	42,698	61
99	an passes." "Indeed?"	I	said politely.	"Very my	43,628	62
100	id it not?" "Did it?"	I	said dryly.	Poirot laugh	47,535	68
101	ardly think that likely,"	I	said slowly.	"And yet-of	48,304	69
102	." "My dear Caroline,"	I	said irritably,	"can't you t	48,646	70
103	ir?" "I'm not very sure,"	I	said doubtfully.	"How did	49,912	72

104	ink ; I know." "Really?"	I	said incredulously. "Yes	51,245	73
105	to make sense to me,"	I	said dryly. "Ah!"said Po	51,290	73
106	or said eagerly. "Yes,"	I	said maliciously. "He sa	51,500	74
107	ld me the other night,"	I	said encouragingly, "that	53,830	77
108	an imbecile nephew?"	I	said curiously. "Didn't yo	57,335	82
109	none left over for me,"	I	said dryly. I was amuse	57,793	83
110	ou really believe that?"	I	said incredulously. "I se	62,292	89
111	ral public did–" "I did,"	I	said ruefully. "I suppose	65,226	93
112	't know what to think,"	I	said frankly. "What was	66,323	94
113	or a moment, and then	I	said slowly : "The first on	66,393	95
114	dow." "The window,"	I	said quickly. You, too,	66,994	95
115	alph?" "With Ralph?"	I	said, surprised ; "there is	3,851	6
116	n down here." "I see,"	I	said, rather amused by	5,530	8
117	d at last. "I think so,"	I	said, surprised. "There w	20,435	29
118	stions?" "Not at all,"	I	said, with an air of surpr	31,612	45
119	now what you mean,"	I	said, quite untruthfully.	33,028	47
120	ntioned." "Dear me,"	I	said, rather taken aback	37,696	54
121	h me." "By the way,"	I	said, rather sheepishyly,	47,421	68
122	nce unfmished. "Well?"	I	said, with some curiosit	48,752	70
123	rumpet." "Poirot has?"	I	said, very surprised. "Ye	51,590	74
124	s to see you." "Well,"	I	said, rather irritably, for	54,540	78
125	t's family by this time,"	I	said, exasperated. "Pre	57,400	82
126	Home Office expert,"	I	said, amazed. "My dear	57,622	82
127	n your modesty!" "Oh!"	I	said, rather taken aback	62,064	89
128	o my feet."Well, well,"	I	said, with a slight yawn	69,574	99
129	an."_"If I could help–"	I	suggested diffidently. B	7,047	10
130	rhaps I'd better be off,"	I	suggested rather awkwa	42,025	60

5, 6, 7 WordbanksOnline を利用。

8 堀田（1989）は，このような種類に含まれる副詞として，本文でとりあげた以外に，interestedly, angrily, sadly, enviously, griefly, absently, happily, regretfully, incredulously, mysteriously, dreamily, meditatively, good-humouredly, indifferently を挙げている。

使用テキスト

Agatha Christie, 'The Murder of Roger Ackroyd' in *Agatha Christie : Five Classis Murder Mysteries*. 1985. Avenel Books.

参考文献

荒木一雄・安井稔（編）. 1992.『現代英文法辞典』東京：三省堂.

Biber, D., S. Johansson, G. Leech, S. Conrad and E. Finegan. 1999. *Longman Grammar of Spoken and Written English*. Essex : Pearson Education Ltd.

Greenbaum, S. 1969. *Studies in English Adverbial Usage*. London and Harlow : Longman Group Limited.

堀田知子. 1989.「副詞とエンパシー」『帝国学園紀要』15 号.

Huddleston, R. and G. K. Pullum. 2002. *The Cambridge Grammar of the English Language*. Cambridge : Cambridge University Press.

稲木昭子. 2003.「謎解きのことば学ー断定をさけるテクニック」『TAM 研究論集』第 7

号.

Inaki, A. and T. Okita. 2005. "A Small-Corpus-Based Approach to Alice's Roles." *Literary and linguistics Computing*, 21-3 : 283-294. Oxford : Oxford University Press.

ケニイ，アンソニー（著），吉岡健一（訳）. 1982.『文章の計量』東京：南雲堂.

Leech, G. N. and M. H. Short . 1995. *Style in Fiction*. London : Longman.

McEnery, T. and A. Wilson (eds.). 2001. *Corpus Linguistics : An Introduction*. Edinburgh : Edinburgh University Press.

Meyer C. F. 2002. *English Corpus Linguistics : An Introduction*. Cambridge : Cambridge University Press.

毛利可信. 1986.「アガサ・クリスティに英語を学ぶ 1-12」『翻訳の世界』

岡田伸夫. 1985.『副詞と挿入文』東京：大修館書店.

Quirk, R., S. Greenbaum, G. Leech and J. Svartvik. 1985. *A Comprehensive Grammar of the English Language*. Harlow : Longman.

Renouf, A. 1987. "Corpus Development." In Sinclair, J. M. (ed.), *Looking Up*. London : Harper Collins Publishers. pp. 1-40.

Scott, M. 1999. (version 3.0). *WordSmith Tools*. Oxford : Oxford University Press.

Scott, M. 2002. "Comparing corpora and identifying key words, collocations, frequency distributions through the WordSmith Tools suite of computer programs." In Ghadessy, M. et al. (eds.), *Small Corpus Studies and ELT : Theory and practice*. Amsterdam and Philadelphia : John Benjamins Publishing Company. pp. 47-67.

Scott, M. 2005. "The Behaviour of Key Words," A Keynote Speech of Corpus Linguistics 2005. The University of Birmingham.

Stubbs, M. 2005. "Conrad in the computer : examples of quantitative stylistic methods." *Language and Literature*, 14 : 5-24.